

放送人の会

No.75

2016.9.23

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉
編集担当 伊藤徹吉(広報委員長・編集長)、鈴木典之、
菅野高至、逸見京子、前川英樹(HIP担当)、松尾羊一
事務局 佐藤真美子、須藤恵美子

自主・自立ということ 放送人の会 会長 今野 勉

1. 会報臨時発行の11月

今号の発行は、予定外の発行である。臨時に出すほどの大事件が起きたわけではない。発行に至ったいきさつは、こうである。

夏が終わりに近づいた頃、複数の理事から「ここの夏のテレビはいろいろ面白いものが多かった。そのことを皆で話し合っただけに載せることはできないか」という声があった。

一人だけの声に終わっていたら、会報の臨時発行ということにはならなかったかもしれないが、その声に同調する理事・会員が他にもいたことが、私の許にも知らされた。

放送人の会は何かやるべきことが細かく決められているわけではない。その時々、会員がラジオやテレビを題材にして何か発信したいことがある。自主的にやる、それが会としてやるべきことになる、という原則で動いてきた。自主、自立の精神に基づき集まりが放送人の会だ、ということである。

その意味で、面白いと思つた番組のことを会員をはじめとする外部の人に伝えたいという熱く強い思いを抱く会員がいるというところは、放送人の会は、今も会員の初心に支えられているという証である。そう思つて私も会報発行に賛意を示した。

とは言つても、会報の発行にはお金がかかる。会の財政は、会員の会費をベースにして放送番組センターや放送文化基金などからの支援を得て、ぎりぎりのところでやりくりされている。予算上は今回は10月の日韓中テレビ制作者フォーラムを終えたあとのフォーラム特集号だ。臨時発行してしまえばフ

フォーラム特集号の金がなくなる。とはいえず、会員の思いにも応えたい。

考え出された案は、日韓中フォーラム特集号は、日韓中フォーラムの予算に組み込んで処理するということだった。理事会で了承され、本会報がめでたく会員の皆様に届けられることになった。

自主、自立とお金のやりくり——理想と現実、おそろしくいつもこうした緊張関係の中で動いていくのである。

2. 長沙大会変更のこと

長沙大会が当初の10月13・16日の予定から急遽、開催地を北京に変更して期日も10月21日から25日までになったことについては、すでに会員や他の参会予定者の皆さんへの存じの通りである。

中国の主権組織である中国電視芸術家協会と主催者の湖南テレビの間でうまく共同作業が出来なくなつたのが変更の背景にあるようだが、詳細はまだ不明である。

が、これまでの中国におけるフォーラムのありようを考えると、解ることがある。それは、中国電視芸術家協会は、開催地のテレビ局に経費や運営をかなりの程度で依存していたよ、ということである。今まではそれでうまくいっていたのだが、今回は依存先の都合で開催直前の変更を余儀なくされたのではないかと推測する。

願ひて、わが放送人の会はどうか。放送人の会がフォーラムを主催する場合の経費は、9割方諸団体・組織からの助成金、賛助金寄付に依存してきた。また、開催地の自治体

の協力、あるいは開催会場の所管者の協力にも頼ってきた。

ただし、フォーラムの内容や運営に関しては、主催者として、自立した立場を譲ることはしてこなかった。つまり、財政上は外部に依存せざるを得ない、という現実と、自立運営という理想を、ぎりぎりのところで折り合いをつけて、どうにかやってきたというところだ。

放送人の会は、個人の自由意志による参加によって成立している。当然、会の自立は公の核心だ。そして、自主的発意による活動ということも、組織の核心だ。

この秋、当会の内外に起こつた二つのことは、あらためて、私たちの会はどういう会であるのかと思ひ起させようとした。

第18回「放送人の世界」のお知らせ

本年度の「人と作品」は、堀川とんこうさんとそのドラマです。
ふるつてご参加ください。

日時 11月19日(土)、同20日(日)

いづれも午後1時から夕方まで
場所 上智大学10号館講堂

上映予定番組

- ◇モモ子シリーズ第1回「12年間の嘘」
- ◇「私を深く埋めて」
- ◇「恋人たちのいた場所〜袋の男」
- ◇「父系の指」◇「ステイル・ライブ」
- ◇「或る『小倉日記』伝」

司会 今野 勉

参加申し込みは事務局まで。

消夏特集

2016夏のテレビ

A 「熊本地震と豪雨災害」、「参院選と初の女性都知事」、「オバマ広島訪問」、「リオ五輪」といろいろ重なった夏だった。

B わけても天皇退位をめぐるお言葉、巨泉と水六輔の死などいわば「昭和終焉現象」が注目された。平成ではSMAF解散ぐらいか。

C 天皇もお疲れのようだが、われら民草も団塊世代論からそろそろ80歳代をどう生きる？に移っている。友人や同僚はどんどん死んで行く。社会的存在ではなくなる。生と死をめぐる孤独感なんて境地でもない。

D 天皇だって制度としての近代天皇制下での日常業務と天皇家行事の殯り（もがり）の日々のジレンマに悩むお言葉だった。

A 殯りとは死者の蘇りを願い、すぐに埋葬しないで腐敗が続くまで儀礼を尽くす祈りの生活を言う。天皇が戦争の激戦地を度々訪れたり、災害首見舞いに尽くしたのも、もがりの近代的な行いなのだ。それが肉体的に出来なくなかった。退位しかないではないか。

B 小池百合子都知事の醜聞是非はさておき、魚河岸と野菜市場の豊洲移転論議では実家が魚問屋だったオレにはもつと深刻な問題点を指摘したい。

C 何故家業を継がなかった？

B 魚はスーパーやコンビニでトレーになった品を買う。それを見込んで例えはイーオンやセブンイレブンの大手業者は「沖買い」や路地・ビニールハウスの先買いで市場を通

さず、直接スーパーに卸す。地元の漁協もセリのない一括買取り契約だからムダがない。豊洲の巨大な新市場より築地の「場外」商いに力を入れたい。閉市が減つても上野アメ横が有楽町スシ屋横町になって残ったように、だ。

C 各産地が出資して漁場別の店を場外に設けた。生鮮食品品のブランド化のパワーに豊洲は負ける。いずれが豊洲で閉古鳥の豊洲になるだろう。

D 朝の3時起きなんて商売はごめんだ、と跡継ぎがいない、卸し仲買い（廃業）が増え、就活の相手にもされない。豊洲のガレージ化は目に見えている。

A 政治家と役人の発想である国際空港の成田と国内の羽田空港の住み分け政策が、いまでは便利な羽田の国際空港化に人氣が移り、渋滞で不便な成田では勝負にならない。

B それと豊洲移転問題は酷似しているのに不勉強なテレビや新聞はどこも触れていない。

A 昨年は戦後70周年記念で隠れていたいろんな事実が掘り起こされて数多く放送された。それが71年の今年に引き継がれたのか、70年の遺言集の中の真実から制作者たちは何を残して行くのか検証が必要で、重要だと思ふ。作品はそんなに多くはなかったが力作、深い意味のある作品があった。

B いつもの年にはないような企画があった。単に戦争体験を作品に残すのでなく、若い人たちがネットで追体験のような形で真面目に聞いているのが分かった。

C 「加藤周一 その青春と戦争」(E.T.V

特集・8・13放送)は彼の一貫した姿勢をよく描いている。

D 加藤周一を誤解していた。彼は戦後中村真一郎、福永武彦と「マティネ・ポエティック」を結成するが、それまで戦争に何にも関わっていないと思つていた。番組をみて誤解はとわかった。

A 医学生だから徴用は免れた。原爆の調査団に入って広島へ行っている。広島のことも書いてるし、生まれ育つた渋谷のことも書いてる。そんなことも含めて加藤周一の全体像がよくわかった。

B ドラマ「百合子さんの絵本」陸軍武官小野寺夫妻の戦争（終戦スベシヤルドラマ、NHK、7・30放送)は小野寺がスエーデンから送った情報がヤルタ協定の情報も含め軍幹部にすべて握りつづがされた話だ。

C 香川照之と妻師丸ひろ子。妻師丸がよかった。

A 脚本池端俊策、演出柳川強の強力スタッフでよく調べて作っている。

B 同じようなシチュエーションのことを海軍の参謀たちが語るドキュメンタリーがかってあった。半藤一利の本をベースにしたものだが、参謀たちはかつての犯罪的な処理を風化したいま自慢話として語った。この変質は、このドラマで面白いドキュメンタリーになっている。瀬島龍二を思わせる男が戦後財界の黒幕になるが、その男の写真をみながら小野寺は自分の戦争回避の努力が空しかったと思ふ。あのあたりの池端の脚本はうまい。

C この話がかつてNHK特集で「日米開戦不可ナリ」のタイトルでやった。先日、池端

さんから「明治と昭和のあいだを行ったり来たりしている」との集書をいただいたが、そうして歴史のある脈絡を掘り当てたと思ふ。それは「足尾から来た女」では田中正造でなく、名もない女新田サチだったが、このドラマでは小野寺中佐ではなく、小野寺百合子だった。タイトルに「小野寺夫妻の戦争」とあるように、そばにいた女の視点で描かれている。9月に「夏目漱石」をやるが、これも妻の視点から描く。

D 小野寺百合子は素直な人で、エレン・ケイの女性論をいち早く翻訳し、ムーミンはじめスエーデンの絵本を数多く翻訳している。一族は外交官の家系で娘さんはチエユ協会会長。

A 海外武官の情報を作戦本部が無視し、陸海軍が対立して情報をお互いに見せなかつた。陸海軍は外務省をバカにして相手にしなかつたことなどが、御前会議で東郷外相が理解されないことに結びつくが、このことはこれまで何回かドキュメンタリーでみた。朝日の笠信太郎がスイス、ベルリンにいたときにも似た話がある。今野勉の3時間ドラマ「海は魅る」にも出てくる。しかし、これまで詳しく、夫婦のドラマとして描かれたのは初めてだ。

B 加藤周一のおじさんも駐在武官でいろんな情報を持っており、加藤は尊敬していたという。

C 小野寺百合子が書いた「バルト海のほとりにて」という本があり、吉村昭はか何人かの作家がこの話を本にしている。

D 今年の夏はなんと言つても「戦艦武蔵」(NHK、8・6放送)と「ラストアタック」

(NHKBSプレミアムの、8・15放送)の2つのセミドキュメンタリードラマだ。女性介護士(石原さとみ)は、レイテ沖で爆死した祖父の妻だった祖母(渡辺美佐子)とともにも夫の最後を知ってお遍路姿の戦友(津川雅彦)を捜し当て、戦艦武蔵の亡霊と共に生きた戦後とは何か。それを噛みしめる(石原さとみ)。

A 一方「ラストアタック」は、島を占領した米軍の「日本兵狩り」から兵士を護る島民たちは戦争を平和だという気負いもなく「マブイ イギサ チユラサ シマサ」(あなたの心が大きく美しい島のようにありますように)と自然を共有している。その島民の姿に感動した日米兵士の心の揺れを描き切った力作だ。

B 沖縄本島のすぐ北の伊平屋島が舞台。沖縄本島上陸の前に先遣部隊がこの島を占領した。沖縄本島の戦いは6月23日で終わった。伊平屋島は8000人の米兵が上陸し、島民はすぐ降伏して米兵と仲良くなる。

C 脚本、演出は上野潤也。史実を追って淡々と撮っている。沖縄本島で捕虜になると収容所に入れられて全く違う状況だが、伊平屋では米兵と島民が互いに「東条重英(二ノレイジー・ジャンプ)」し思いながら不思議な交流が生まれ、島民の中に不時着して生き残った特攻兵と米兵の交流も生まれる。

D 20年ほど前の玉置浩二が出た映画「最後の弾丸」では、戦闘を重ねて最後に残った銃弾を1発ずつ持った日豪の兵士の交流だったが、「ラストアタック」には戦闘はない。背後にまた終わっていない戦争がある。

C 「ラストアタック」とは終戦の詔勅のあとの特攻命令だ。

D 抒情詩と叙事詩を織り交ぜたというが、抒情は美しい島での島民の日常の暮らしだ。この平和な暮らしが軍国主義に染まった少年特攻隊員も米兵も好きになっていく。そこに人間としての真実があるのではないかと、というのがメインのテーマだろう。

A 今年は大上段に振りかぶった作品はなくて、大きな変動が個人の生活をどう変えたかのヒューマンドキュメントに面白いものがあった。「村人は満州へ送られた」(園東71年目の真実)(NHK、8月14日放送)は、その一つだ。満州移民については「農村の次三男が強制的に送られた」(菅原)と思っていたら重傷だった。などとはよく言われてきたが、この作品は長野県の村長の日記をもとに作られていて非常に説得力がある。

B 村長は最初村民を送り出すことに反対していたが農林省が「村を捨てて行くのではない。満州に分村ができるのだ」と分村計画を打ち出したのに逆らえなくなった。満州へ行った村民は軍隊に助けられることもなく死んだと知って村長は自殺する。この作品は個人を通しての史実なので真に迫るものがある。

C データを丁寧に扱っている。関東軍は南方に送られてその穴埋めに村人が使われた。

D 国家は国民を救わない。あえて盾として送っている。

A 拓務省の所管かと思ったら農林省の所管だ。あの状況で役所が縄張り争いをしていく。

B NSへの「沖縄空白の1年」がいい。沖縄の今日のはあの45年、46年で決まっている。日本は沖縄を見捨てて戦後復興に必死だ。ア

メリカはベントゴン(統合参謀本部)と國務省の考えが全く違う。陸軍と海軍の考えも違い、國務省サイドは日本政府から離れた独自の自治政府を作ろうとしていた。

C 沖縄はすぐ返還していいという意見もあった。あれには驚いた。

D マッカーサーは本国に「沖縄を米軍の軍事基地にしても日本は反対しない。なぜなら沖縄人は日本人ではないのだから」と打電した。あれはショッキングだ。沖縄の人はいまあれをみてどう感じるのだろうか。

A かつて九州には「琉球、朝鮮おことわり」という差別的な開港し札がみられた。

B 米ソの冷戦、朝鮮戦争で沖縄はやむをえず米軍基地になったと思っていたがそうではなかった。

C 戦後日本本土に残っていた沖縄の人を返す動きもあった。国民を棄てた動きだ。10万人が帰った。

D 昨年の終戦特集にも沖縄の日本軍が沖縄の人を日本人として扱わなかったという事例がいくつかあった。昨年、今年の終戦特集は沖縄の人の気持ちを逆なでした。

A 沖縄返還のとき、沖縄には独自の憲法が必要だとの意見があったし、いまなお沖縄独立論があるのは無理からぬことだ。

B 伊波普猷などの沖縄学が動かしたわけではない。

C 台湾は50年間日本に統治されていまだに親日的だ。台湾の親日感と真逆なのが沖縄だ。その根っこがここにある。

D 「戦艦武蔵」はNHKのデジタル映像技術の凄さに感じいった。

A 岡崎宗の脚本、演出で、86歳の年齢であ

公開トークショー
第14回 人気番組メモリー

ローカル路線バス

乗り継ぎの旅

日時 10月8日(土) 午後1時半〜4時
場所 情文ホール
(横浜情報文化センター6階)

ゲスト 太川陽介(出演)
蛭子能収(出演)
キートン山田(チレーター)
越山進(制作)

番組概要

太川陽介と蛭子能収に女性ゲスト(マドンナ)を加えた3人が、路線バスを乗り継いで目的の地を目指す旅番組。移動は原則としてローカル路線バスのみを使用。目的地(向かうルート)は自分たちで決める。情報源は地図・時刻表・案内所・地元の人のみ。撮影交渉も自分たちで行う。等のルールのもと、3泊4日の制限時間内にゴールを目指す。几帳面な太川とマイペースな蛭子のコンビや、その日の宿が見つからない、日程内に目的地に辿り着けない、路線バスがつかないなどハプニングだらけのガチンコ旅が人気となり、今までに23作を放送。2016年2月には映画化もされた。

の執念には驚嘆した。過去に遡って人を訪ねる手法はよくあるが、この場合素直に入って行けたのはやはり語り口のうまさだろう。

B VFXの技術はどうなのだろうか。テレビではいいのかもしれないが映画ではあのレベルはく当たり前だ。おじいちゃんや孫の人間ドラマを津川雅彦が演じる。話は二つあって一つは武蔵はいかに沈んだかで、この戦闘シーンは映画の映像に勝ってこないのだから、もう一つの人間ドラマに力を入れる方がテレビ的だと思う。

C いや、どんな技術を使おうと戦闘シーンはフィクションなのだ。現実の軍艦や戦闘機の前にはカメラはありえない。だから人の顔の陰影を強めたり、コントラストをばしてリアルでない映像にしている。その戦争の神話化した世界とお遍路、孫娘などの現実を対比させている。NHKの技術陣は相当勉強し工夫したと思う。

D VFXは「坂の上の雲」のときから使っていて、特にエンタープライズにはその技術のストックがあり、岡崎さんは使うように仕向けられた。あれはだんだん疎外化する。戦闘シーンの描写の難しさ無意味さはあるのでそれをなして出来ないかと考えてもよかつた。

C いや、戦中・戦場・戦後体験者不在の将来、「戦後」を語り継ぐ手法として映像の神話が意味をもつてくる。

A 映画「紙屋悦子の青春」(NHK・BSプレミアム、8月12日放送)は家の中だけのワンセット。それで戦争を描いている。黒木和雄監督の遺作で特攻にでて行く男が親友に恋人を託す物語りだ。制作費がないから

落とせるものは極力そぎ落として作る。

B その対極がクリント・イーストウッドが作った「破黄島からの手紙」(NHK・BSプレミアム、8月1日放送)。私の伯父が硫黄島で死んでいるので厚生省の遺族選考団に申し込んで先日破黄島に行ってきた。この目でみた壕、掘壕山、クジラがいる美しい海岸などを頭に置きながらこの映画を見た。硫黄が噴き出し暑は暑い。20メートルもあるげ蒸し風呂の状態だ。ここで3か月戦ったと思うと胸が熱くなる。そんな目でみるとこの映画の戦闘シーンは凄い。死ぬのも生き残るのも理由なんかない。日本軍も米軍も不条理な戦いを戦っている。この映画は日本人が作るべきだったと思う。

C 地方局が作った作品をみると、ヒロシマ以降の空襲を描いたものが多い。富山、秋田、宮城がそうだ。また、仙台の西北の不忘山に3月10日B293機がぶつかって墜落したなど、あちこちの話を知った。8月13日の「報道特集」はそれをファイナル空襲と名付けて特集していた。残っていた爆弾を捨てに来たような空襲がおこなわれている。

D アメリカは8月15日以前に日本のボツダム宣言受諾を知っていた。それ以降の空襲は意味がないのに。

A アメリカは9月2日のミズリー号調印まで戦争は続いていると考えていて、8月15日以降の空襲は国際法に全く違反しないと言った。

B 中国も終戦記念日は9月2日と言った。3月10日から8月15日の東京は完全に無政府状態だった。焼け跡ばかりで配給もない、隣組も機能しない、行政の末端組織は

なくなっている。新聞も来ない。あれでよく生きて来たものだ。その前は「勝った、勝った」とウソのニュースがあったのだが、それもなくなつて、ただみじめだった。

D 機銃掃射には間近で出会った。そのあと無数の宣伝ビラが降ってきて日本の敗戦を知った。

C 「緑十字機決死の飛行」(ザ・スクープ・スオエシヤル、テレ朝、8・14放送)についてエピソードを話すと、あれには最初鳥越俊太郎が出ていたのだが、都知事選に出たので急遽その部分をテレ朝の局アナがやった。「ザ・スクープ」はいい作品を多く出し、賞も貰い、この番組は凱旋再放送だ。

D 今年の作品は歴史がすつと目述してきたような秘話を発掘しているのが多いが、この作品もそうだ。あんな時にあんな飛行機でマンカーサーのもとに飛んでいって、静岡県釣島海岸に不時着した。十分ドラマになる面白い話だ。

A 17人の軍使が終戦処理の交渉に行くのだが、厚木は反乱軍が占拠して機は撃墜される恐れもあった。沖縄の伊江島で米軍機に乗り換え、マニラで交渉、スリリングな話が続く。

B 8月15日を終戦とするのは日本だけでこの日も9月2日までの戦争中の話だ。制作は原一朗、綿密な取材をしている。

C 飛行機が遠州灘海岸に不時着して報告が間にあったのだが、際どい話だ。村人が遺品を保存しているのも面白い。

A あの交渉で日数を稼ぎ厚木の反乱軍を鎮圧できた。鎮圧出来なかったらどうなるだろうとそつとする。薄氷を踏む思いだ。

B アメリカが駐留してソ連の侵攻は止まった。

C 厚木の反乱は今回臨の話だが、もつと正面に据えて番組を作ってもいい。

A 映像の世紀「最新科学の実験場・科学者と戦争」(NHKBSプレミアム、8月13日放送)は戦争が軍人同士の間で戦って大量殺人兵器を使う総力戦に変わってきたが、その中で科学者はどう加担してきたかを調べ上げていた。日本も原爆を作ろうとした。

B 有名な科学者だと尊敬している人たちがみんな兵器開発に関わっている。世界を破壊させる方向に科学者が協力していた。

C 戦後、米ソはロケットのフォン・ブราวンや原爆の専門家などの学者を奪い合っている。

D これまで個別に「映像の世紀」でやったものをまとめたもので、目新しい事実はないがこのようにまとめることは必要だ。

A 同じようなものでNSへの決断なき原爆投下、米大統領71年目の真実(NHK、8月6日放送)がある。「原爆投下をトルーマンは知らなかった」とはよく言われ、本にもかなり書かれているが、グローブスの手記が見つかつたので番組になった。手記を辿って行くとならば政者とはこういうものなのかというところがよくわかる。こんなことは知っていると、分かっている、と思わず繰り返してやるべきなのだ。

「記憶されない歴史は繰り返される」という言葉がある。記憶させなくてはいけない。世界記憶遺産はそう考えている。

B 今年の作品をみて戦後80年はあるのかと思つた。これまでのドキュメンタリーでの

証言は確実にならなくなる。社会も混乱に向かいそうだが、その中でドキュメンタリーは発掘やスクープに努力するより、記録、記憶を維持すべきではないか。先日の「新映像の世紀」をみて、これからはこんな作り方がテレビの重要な役割なのだと思う。

C NHKBSのドキュメンタリーをみていると外国のドキュメンタリーには再構成が多い。あれは学びたい。

D 「ある文民警察官の死」カンボジアPRK O 23年目の告白」(Nスベ、8月13日放送)は「いまや戦前だ」という状況につながる。

A カンボジアでは国連ボランティアで行っている殺害された中田厚仁さんが有名だが、こちらは警察官。各県警から選ばれて75人が参加した。たまたま手記が入手でできて番組になった。高田晴行警部補が死んだ状況をみるとUNNTACは当時明石康さんが代表。安全のために何にもしてくれなかった。駆けつけ警護の事態はこれから南スーダンで起る。

B 彼らは護衛用の武器が支給されず、やむを得ず15ドルでピストルを買い、マシンガンを手に入れた。事件が起こった当時全く報じられなかったわけではないが、駆けつけ警護やUNNTACとの関連での報道はなかった。安保法廃案成立の前に放送して欲しかった。

C 「魂のハーモニ、岩代太郎と矢井田隆」歌人・桃原色子(とうはるゆうこ)の足跡を訪ねて」(BSフジ、8月15日放送)は作曲家岩代太郎の父で作曲家の浩一がかつて歌人の桃原色子に作曲の約束をしたのを、息子の太郎とシンガーソンガライターの矢井田隆が果たすための橋、桃原色子は大正元年

沖繩生まれ、若くして口語体自由律の短歌で注目されたが、戦後33年経って定型の歌集「沖繩」を発表している。桃原は昭和18年(20年)は台湾にいて沖繩戦の体験はない。

D 「原爆救護」被爆した兵士の歳月」(NHKBS、7月24日放送)は少年兵が広島軍団に集められ、原爆投下直後被災者の救護を命じられて爆心地へ行き、すさまじい体験をし、その後放射能による障害に苦しむ歳月を描く。

A 少年兵は軍団が解散して故郷に帰るがまわりの人からは原土病だと差別され、ひどい目にあう。そのうち原爆被災救護法ができ、国が救済を始めるが彼らは「あれは一般市民の被災者が対象で志願兵として広島に行った人間が名乗り出るのは偽善がましい」と我慢して、被爆者の認定申請をしなかった。歳月が過ぎ、仲間ほとんど死に絶え、一方救済の範囲も広がってやっと認定申請に名乗りをあげるのだが、認定審査は時間ばかりかかって、認定されたのはやっと最近のことだ。

B その少年兵たちの歳月を一番底辺で働いていた人が語る。制作は「女たちのシベリア抑留」を作ったテムジンの小柳らひる。証言が実にうまくとれている。

C 少年兵の一人は「自分は江田島で特攻隊要員だった。広島に原爆が落ちなかったら、自分は特攻隊員として死んでいただろう。生き延びたのは原爆のおかげだ」と証言する。この番組は8月6日に再放送され、同日放送された「決断なき原爆投下」と対をなしている。落とした側からと落とされた側だ。

D 被爆米兵の話があった。オバマが広島でハグした人が被爆した米兵12人について調

べた人だ。オバマは「調べてくれてありがとう」と言っていた。

A 「名前をなくした父」人間爆弾 桜花 発案者の素顔」(NHK・E TV特集、8月26日再放送)。「桜花」は人間が機転するロケット爆弾で飛行機に吊り下げて敵の近くで発射される特攻兵器。これを発案したのが太田正一。自殺したとされていたが戦後偽名で生きてきた。息子が63歳で、元「桜花」の搭乗員を探して父の過去に向き合う。

B 元搭乗員の太田正一に対する評価はいろいろで、「ひどい奴だ」と「立派な人だった」に分かれる。

C 特攻作戦を発案したのは海軍参謀の大西隼二郎。太田正一だけで桜花作戦が進められたわけではない。

D 番組の制作はNHK福岡。久保田隆という女性ディレクター。昨年だったかNスベで「特攻何故拡大したか」を作ったDのひとり。番組に鹿屋は出てくるが福岡はおよそ出てこない。

A 息子が真面目で、親に言われて電気屋さんになった。あの息子が説得力を感じた。

B 太田正一は2回自殺しそこなっている。一度は終戦直後ゼロ戦で鹿屋を飛び立ち海に突っ込んだ。それを狂言自殺たと言おう人もいる。2回目は高野山に詣でたあと紀州の海に飛び込もうとして止められた。

C 高野山にはいろんな霊があるが、一つだけ大きな飛行機の尾翼の墓があり、墓碑に陸軍××とありまわり一帯が陸軍の墓だ。番組にも出たが異様に目立つ。

A 「二人の贖罪」日本とアメリカ・憎しみを越えて」(NHK、8月15日放送)は真珠

湾攻撃をした淵田三津雄海軍中佐とアメリカの最初の空襲になる名古屋の空襲で爆撃手として参加するアメリカ兵ジェイコブ・デインエイザーの物語。ジェイコブは空襲のあと中国へ飛び、不時着して捕虜になる。ひどい目に会うのだがそのとき日本の看守から聖書を渡される。聖書の「主はすべて許し給う」の一節に出会い、戦後アメリカから日本にやってきて、「自分は日本人を憎んでいたが、聖書の言葉で考えをあらためた」と伝道して歩く。一方淵田三津雄は故郷に帰って仕事がなく困っていたときジェイコブに会い、キリスト教徒になり、アメリカへ伝道に行つた。それぞれかつての敵国に来てのそれぞれ生き方を描いている。

B この番組のCPは「新映像の世紀」で放送人グランプリ優秀賞を受賞した寺園眞一。協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

協力中田整一とあるが、これはNHKのディレクターで淵田三津雄の回想録を編著した

会員交流のための「飲み会」のお知らせ

11月10日(木) 18時~20時30分
場所 青山荘 会費 5,000円
饗宴十シ、雑談十シ、飲み放題です
気楽に、参加をお待ちします
秋の夜、愉しく談話しましょう!
追って 案内を差し上げます

人だ。この本がこの企画の出発点だろう。この番組は憎しみの連鎖をどう断ち切るかというテーマで、現在の世界に通じるテーマだ。中田整一は昭和史、特に戦争の歴史のプロで2・26事件などの特で歴史的なスクープを2件とほしている。NHK退職後ノンフィクション作家となり、数々の賞を受賞している。彼にいろいろ教わって番組は作られたのだらう。先輩が作ってきたものを継承する、NHKのドキュメンタリーを作る流れのようなものを感じる。

C 8月6日のNSP「決断なき原爆投下」は広島島の制作だ。東京から広島に転勤して行くドキュメンタリー系のCPは8月6日の番組を新しい切り口で必ず作らなければならぬ。1 昨年は「原爆投下の情報を上層部は知っていた」、昨年は「相生橋の写真新しい映像技術で復元」など、作る人は変わるが何か新しいことをみつけて作る伝統がある。CPに聞くと、広島への転勤命令が出たとき「お前何やるかわかっているだろう。男をあけて帰ってこい」と送り出されたそうだった。

A 報道特集「8月6日に走った救護列車」(TBS、8月6日放送)は壊滅状態の広島駅から唯一走った列車の話で、多くの負傷者を広島から遠ざけて運び救護した。このために働いた人の多くがその後原爆症になる。

B 戦後70年では民放もゴールデンで何本か終戦特集番組をやった。今年は激減、ない局もある。その中で光ったのがテレビ東京の「池上彰の戦争を考えるスペシャル」(8月7日放送)。今年は第8弾。天皇とマッカーサーをやった。これは毎年8月中旬にゴールデンタイムで2時間やってきた。純粋ドキュ

メンタリーではなく、おなじみのタレントさんと池上さんの会話を進める番組だ。「マッカーサーは陸軍士官学校の秀才だった」、「トルーマンと仲が悪かったので二人の銅像は距離を置いて立っている」とか、「昭和天皇と並んで写った写真はほかに2枚あって、それはどんな写真か」とか、小さな話を丁寧に集めていた。マッカーサーがフイリピンから撤退するときの「I shall return」などへえ、そうだったの」と思う話を積み重ねてマッカーサーと昭和天皇がいかに大きな存在だったか興味深くやった。おそらく来年もやる。

C 池上彰も広島、奥通信部にいた。通信記者で筆がたつ。彼の話には目新しい特別の話はないが、どれもニュースで培ったやさしく伝える能力は貴重だ。外信部にいたことはなく国際関係の仕事はやったことがないのに、あれだけ調べ、取材し、毎年まとめているのには感心する。

A 彼は調査スタッフを持っているのだろうか？

B それぞれの局のスタッフだ。個人的なスタッフはいない。あれだけ本を書き、大学で講義しているがスタッフはいない。

C 池上彰に最初に声をかけた民放はテレビ東京で、「戦争を考えるSP」のスタッフは不動だ。選挙番組もテレビ東京でやっている。

D 非常にまじめな男で、あんなに忙しいのにメールを出すことなく返事がくる。

A 天皇のお心の問題は今年の夏の重要問題だ。昭和天皇には戦後遺留問題が濃密にあ

ったと思う。共産党の徳田球一が天皇制廃止を叫び、新聞各社の天皇制を論じたが、そのうち制度論は消え、「天皇について」の論になつてうやむやになった。

B 皇室典範はGHQの意向をくみながら新憲法発布以前に作られ、その経緯はあまり明らかではない。

C 天皇の問題はどんな方向へ行くのか見当がつかない。

D 女帝容認論をつぶしたのは右翼や「日本会議」に集まる連中だ。今回諮問委員会を作るがそこでの結論がどう扱われるかわからない。やるなら女帝問題も含め幅広く議論しなくては皇室の命運は危うい。

A 自民党の二階俊博がちょこちょこ発言して世論づくりをしている。愛子さんも考えられると言ったようだった。

B 安倍は断固女帝は認めない。日本会議は認めない。

C この問題は相当時間がかかる。

D 天皇の言っていることはかなり強硬だ。それは日本会議、安倍の路線と対立する。天皇は「私は国のためでなく国民と心をあわせて、気持ちを揃えてやるのだ」と言っている。憶測するのは憚られるが、大変な問題だと受け止めている。

C 天皇は今までとは違う発想だ。これが新しい天皇像なのだと言いたいのだと思う。そのことを法政大学の田中優子が「サンデーモーニング」で言っていた。皇室典範や法の改正を待っている時間はないだろう。

D 扱いによつては安倍の命取りになる。

A 特例にする、一代限りにするといつても上皇という言葉は皇室典範にない。かといつ

て皇室離脱もできない。できないというより天皇だった人が皇室を離脱するのはおかしいだろう。

B 生前退位の論議はおいて、メディアとの関連はどうなのか。生前退位の意向はNHKのスクープだった。これはリークだったのか？

C TBS報道特集の金平キャスターにも早く情報は届いていた。

D NHKのニュースが午後4時、新聞は夕刊には間に合わず朝刊で一斉に報じるが、民放はすぐに後を追った。その内容は全く同じだ。かつうそれぞれが取材していれば、どこかであるが、だからこんな動きがあることを各社とも知っていて、きつかけが掴めなかったのだと思う。そのきつかけの何がNHKにあったのだろうか？

A 昭和天皇の病気が朝日新聞のスクープだった。あれはリークすることではなく、朝日がキャッチした。今回新聞各社は一面トップで追ったが宮内庁は公式には否定した。それはどこが誰かに書かせている。スクープさせていることが明らかだ。それで伝わるべきことが伝わって、その後で公式に「お言葉をといて段取りだ。この段取りは宮内庁だけだ。シナリオを描いた人がいた。その場合スクープさせるにはどうするか。朝・毎・読・サンケイでなく民放でなく、NHKしかない。

B 宮内庁と菅官房長官は全部事情を知っていたらどう。そこNHKがどんなきつかけを作ったかわからない。宮内庁は秘密主義の権化で、あそこがそんなことをやるのだろうか？

C お言葉のビデオはNHKが代表撮影しているもので、カメラマンは宮内庁嘱託の扱いだ。記者会見はありえないのであの形なら政府は主導権をもって、宮内庁と内閣官房のコントロール下でやれると考えた。

D 今の天皇は役人が持ってきた文章をかきなり直す。昔からそうやって直前まで陰で手を入れていた。役人は非常に嫌うが、大した手直しではない。自分の言葉にこだわった。

A NHKがスクープした時点ですべての段取りは決まっていたはずだ。天皇はメモを見ながらお言葉を読み上げる。しかもバックが何にもない部屋だ。

B いやあそこが宮殿の中の天皇の執務室だ。珍しい場所ではない。

C 8月は意識されていたのだろう。15日の戦没者慰霊祭で天皇は「深い反省」という言葉を使った。安倍総理にその言葉はない。今の天皇はベリリニュー島に行き、お昭和天皇が行かなかった沖縄に何度も行っている。被災地にも数多く行った。それは天皇の意思によるものだ。今回も役人といろんなすり合わせをした。今回も自分の意思を出している。

D 天皇の意思はそうだ。しかし天皇の意思がストレートに出ると政治的行為だとの議論が起る。

A 一片の紙でなく、ビデオで肉声で語った意味は大きい。世論調査では8割の人が「生前退位させてやりたい」という意見だ。

B それは終戦の玉音放送で国民は戦争は終わったとさっと反応したのと同じで、伝統に基づく深いところの意識がそうさせるのだろう。

C 国民の多くは憲法や法的な制約を知ら

ない。あのビデオメッセージで「天皇は大変なんだ」と思った。「少し楽にしてあげよう」という気持ちだ。

D ビデオメッセージのあと天皇の日常は多くの神事のスケジュールでいっぱいだという映像が一斉に放送された。あれは宮内庁嘱託として代表取材したNHKの映像で、民放各社に配られた。

A 自分に万一のことがあったら昭和天皇のような大袈裟な葬儀はしないで欲しい。火葬にしてくれ、というのには法律に触れることではないので大きな抵抗もなく本人の意思としてそのまま受け入れられるのだろう。

B 天皇は国民ではないが人間なのだから、今回人間宣言をして基本的な人権を要求した。

D いや、国民の持つ基本的な人権を天皇は極めて制限されている。戸籍はない、参政権はない。

A 今の天皇は人間臭いところをずつとだしてきた。意識してそうやってきた。

D まとまらないが、NHKや各民放の現場に今なお繋がっている「放送人の会」会員の出席者ならでは、上から目線の傍聴者評論にはない生々しい証言の数々を得たという。ことを結びにして、このくらいにしましょう。

(文責 伊藤雅浩)

座談会次第

日時 9月2日(金)午後2時
於 千代田放送会館2階会議室
出席者 伊藤雅浩 隈部紀生 鈴木嘉二、
鈴木典之、藤久ミネ、松尾羊一、
渡辺統史

「日韓中テレビ制作者フォーラム」当初の予定を変更、開催日時、開催都市を変更して実施へ

会報発行の現時点(9月23日)で確認できるフォーラムの概要は

開催日時・10月21日(金)から25日(火)まで5日間

場所・北京市(会場・宿泊ホテル等 未定)

中国から、「10月13日から予定されていた長沙でのフォーラムを延期したい」との連絡があったのは、中国へ送付すべき最終資料である参加者名簿(総数34名)を送った直後の8月29日。参加に向けた国内の取りまとめが終わり、渡航チケットを一括購入、私入を済ませ、来年の東京大会に向け、会場やホテルを予約し補助金申請を行うなどの作業を始めたところでもあった。1年前に開催地を決め、半年前の準備会議で詳細を決めてきたこのフォーラムの延期、しかも直前の通告など、初めてのことである。中国有数のテレビ局、湖南テレビが主催する「金鷹賞アワード」と連携してフォーラムを成功させようと、準備会議で意気込んでいた中国側スタッフを見ていた私には、にわかには信じ難いものでもあった。

延期なのか、無期延期なのか、延期の理由は何か、日本はどう対応するか、韓国はどう対応を要するのかな、その後半月の間、会長

や、我々実行委員は、様々な方程式と、その応用問題を解くことになった。

1週間後、金鷹賞への荷重がかかりすぎ、主催する湖南テレビが対応不能になったとして、開催地を北京に変更、10月11月にかけて実施したいとの中国側の再提案があり、日本は参加者の日程の再調整を行い、中国へ21日からの開催を再提案、中国はその日程を受け入れたことから、あらためて今年度フォーラムへの参加を決定したものである。

なお日本の参加作品は(変わらず)以下の3作品

- ・ドキュメンタリー「老人漂流社会」(NHK)
- ・ドラマ「いつかこの恋を知って、きつと泣いてしまおう」(フジテレビ)
- ・エンターテイメント「熱中コマ世界大戦」(東海テレビ)

担当者として、今回、参加にたどり着いたことには安堵したが、若い人への参加呼びかけ(今回の場合、上記参加作品の制作者たち)に比し、参加を予定していた8人のうち4人が、日程変更に応じられず、不参加になったことが残念でならない。

今後のフォーラムの有り様は、今大会、次回東京大会を実施する中で委員間の議論を行いながら検討していくが、それとは別に、今回の経過、結果については、財政上の損害額も含め、次回会報で詳しく報告したい。

(渡辺統史)

第41回 名作の舞台裏

64 (ロクヨン)

2015年4月〜5月全5回放送・NHK

日時・6月19日(日) 13時半〜16時半

場所・情文ホール

(横浜情報文化センター6階)

ゲスト・

ビエール瀧 (出演) 大森秀夫男 (脚本)

屋敷陽太郎 (制作) 井上剛 (演出)

司会・渡辺純史 (放送人の会)

渡辺 「64」とは何か。1989年1月1

日から7日までの僅か7日間が昭和64年です。その間に事件は起ります。そのとき、この皆さんはどうしていたのでしょうか？

大森 劇団を作った、芝居を作っていました。歌舞曲が禁止され、公演も中止になるから、ちらつと思いましたが、何の影響もありませんでした。

瀧 本業はバンドで、その年「電気グルーブ」を立ち上げました。それから四谷3丁目の小さな会社に入って制作のかけだしをやっていました。

井上 その年は大学1年です。熊本男子高校から文学部に入ると圧倒的に女子が多く、ちやちやらしていました。

屋敷 僕は大学に入った年です。高校は富山で、64の7日間は試験勉強中でした。テレビに面白い番組がなくなると勉強に集中してきました。バブル真っ盛りの時代で同級生の家が国道に面した土地を1億円で売ったという景気のいい話を聞きました。

さんが1967年の生まれ、井上さんが1968年、屋敷さんが1970年生まれ、皆さんほぼ同世代です。同じような時代を生きて同じような時代の空気を吸って「64」のチームを組んだことになりました。

渡辺 さて、本題に入ります。この企画の実現までを：

屋敷 「64」の単行本の発行日を確かめました。4年前です。私と井上は発行前のゲラの段階で出版社から見せてもらいました。「クライマーズハイ」以来久しぶりの横山秀夫さんの本ということで読み始め、夢中になって朝までかかかって読み上げました。「ああ、やっぱりこれドラマにしたいなあ」と思いついて、井上さん、大森さんの「クライマーズハイ」のメンバーに声をかけ、出版社にドラマ化の交渉をしたのが12年の秋です。

渡辺 今「64」は映画が公開されていますが、映画化権、ドラマ化権については？

屋敷 物凄回数数のオフアアがあったそうです。その中でNHKに最初にと許可を頂きました。映画の公開はテレビより1年後ですが、先にテレビでやって貰ったほうが良いという映画会社の考えもあるようです。

渡辺 私見ですが映画よりテレビの方が数倍面白い。(拍手)

井上 ビエール瀧さんを用いたのは？

屋敷 「あまちゃん」で台詞を喋らない人という印象でした。井上が彼しかいないというイメージでTSUTAYAで彼の作品を大量に借りてきて全部見ましたが、どうなんだろうなと迷っていました。最終的に「おじいさん先生」(07年日テレ)を見て決めました。

瀧 深夜ドラマで僕は87歳の老教師で物凄く悪い学校に赴任してきて、トラブルに巻き込まれ一度は死んで、三途の川まで行って生き返る。三途の川まで行った経験がその後生かされるというドラマです。

屋敷 あれを見て間のいい役者さんだと思っただ。

渡辺 顔が大きいから決めたのでは？

屋敷 いやいや、そんなことはないです。(爆笑) 原作には「鬼瓦」という台詞があります。鬼瓦に見えるのは誰だろうということも井上もビエールさんしかないと。

井上 韓国にソングンホという大柄の名優がいて、日本のソングンホは誰だということ瀧さんと言ったので、「鬼瓦」とは言ってます。

屋敷 井上はソングンホに日本語を学んで貰うのとビエール瀧さんどちらが良いかと真剣に考えた。

渡辺 番組の構成について聞きますが、どんなイメージだったのでしょうか？

井上 原作は最初半分くらいまでそんなに引き込まれなくて、最後まで読んで、最初の200ページはこの最後のために延々書かれていたのだと気づきます。小説は一人一人が読んでそこへ辿りついていけるけど、映像でそのままやると前半はかたまりと言われる。そこをどう克服するかは難しいと思いましたが、書かれていない部分もたくさんあって、それを映像でどうするかも難しい。

大森 私は非常に面白いと思いました。横山さんの本は一読して大体こんなドラマになるなという感触が得られます。それがどれだけ広くエンターテインメントとして受け入

れられるかわかりませんが、小説の魅力をドラマにしたいとまずは単純に思いました。

渡辺 14年前の事件があり、現在の事件があり、娘の失踪がありますが、ドラマは1週間の間に起るドラマです。失踪した娘の遺体ではないかと確認に行くと、1週間後に長官が来ると知らされ、1週間後に事件は解決して長官は来ない。この間の1週間が非常に濃密で、その間に14年間が詰まっている。

屋敷 事件、娘の失踪は視聴者にわかる。しかし原作の最初の200ページは地方警察対警察庁という一般にあまり知られていない官僚組織の戦いで、警察の中でも刑事部と警務部という、これも警察の組織に入っていないとわからない。こんな争いをどうやって貰えるかは難しい。われわれもよくわかっていなくてその取材から始めました。

大森 原作では膨大な情報、いろんな事件、いろんなストーリーが組み込まれているのですが、それをいかに簡潔に見せて行くか、それには主人公の三上義信警視について行くことと決めたんです。三上の知らないところ、起るんことが起るって、起るんことを描くのはやめました。三上の悩みや感情を一緒に感じる、体験する形で「64」という事件を感じて欲しいと考えました。

井上 大森さんは最初に今今回モノローグはありますかと言われた。モノローグは後から振り返って言う言葉です。分かって言う。三上さんがそれを言うのと視聴者は三上さんになれないのです。三上さんと一緒に謎を解いて行くようにしたかった。

三上さんは受け身の人なんです。積極的に何かを変えようとするのではなく、来たものに対

処することに追われている。三上さんの内面はその中で徐々に変わって行くのですが、何か三上さんを活躍させなくてはと考えたらこの構成は破綻したでしょう。

瀧 このドラマの制作発表のとき、NHKがビエール瀧を主演にして警察もののハードなドラマを作ろうというNHKはどうかしているんじゃないですか、と言いました。脚本をみると僕の台詞の量が物凄いです。全シーン、ここまで出すのはりの主人公も珍しい。これが出るのか、と思いましたが、三上さんはいろんなものに翻弄されて、右往左往し、どうにかしなくちゃとその場を必死に切り抜けて行く。それが僕がスタジオに入っているというのがリンクした感じですよ。三上さんは警察、僕はNHKという大きな組織に巻き込まれて翻弄されたのですね。(笑)

渡辺 井上さんはこの作品をどんなスタイルのものにしようと考えたのですか？
井上 やはり「クライマーズ・ハイ」の流れで原作、脚本、スタッフが同じ。「クライマーズ・ハイ」は充実感のある仕事で、次の段階へ行けるスキルを掴んだと思えました。今回個々のスタッフはそれぞれ自分を高めようとのぞんだと思います。ふつうタイトルバックはあんなに凝らないのですが、今回いろいろなことを試しています。ドキュメンタリー風なものも多用していますし、最新のカメラを使いながらデジタルカメラも使いました。これまで培ってきたいろんなものを放り込みました。**屋敷** 井上の撮り方の特徴はドラマをドキュメンタリーっぽく撮ることです。台本はあるのだけど、シーンの前後をドキュメンタリーのように撮る。例えば広報室のシーンでは

記者たちが入って来る前から広報部員は作業をしていなくてはいけません。使われるシーンはずっと後なんだけどその前からコピーをとったり書類を整えたりしてそれから記者たちが入ってくる。記者たちが去った後も部員は作業の演技をつづけていなくてはいけません。そんなことが毎回でした。

瀧 三上が広報室に入るシーンはドアをガチャリと開ければいい。ところが200メートルくらい廊下を歩いてドアを開ける。それもちゃんと廊下のセットがあればいいが、スタジオの外のメイク室から「スタートして機材がならんでいるようなどころを歩く。今日見た第一話の冒頭、三上が奥さんと死体を見に警察署へ行くシーンは若者に到着する30分前からカメラは回っています。署へ向かう雪山の道中、僕と木村佳乃さんははたしてその遺体が娘なのかどうか確認に行く親の気分が車の中から雪山をずっと見ている。あのシーンは移動していますからそんなにやりませんが、広報室や記者会見のシーンでは5カメラで撮って、5セットやる。それも台本10ページ以上あるのをやる。

井上 2話の柿沼を問詰めるシーンは20ページ以上あった。
瀧 僕が車を運転してきて角を曲がって、「柿沼の車は？」と見まわして、車を停めて中に入って、「柿沼何してるんだ」と始まって、終わって、速くに幸田がいて、というのを5セットやる。カメラは何カメラもあるもので役者としては正面がない。役者としては三上になりきってやっているのですが、カメラはどこにあるかわからない。橋の下とかとんでもないところにもある。そうやって撮った映

像を編集で上手に切り身に切ってつき合わせ、盛り合わせて作りあげる。最初からこうなると思っただけではないんです。

井上 いえ、こうなると思っただけです。
瀧 こまかい言葉のずれとかアドリブとかイレギュラーなものに期待しているということですか？

屋敷 そうです。スポーツ中継みたいな感じがあつて、4台、5台のカメラマンはそれぞれインカムをつけていて、井上それに向かつて、「2カメラもつと右から」「3カメラもつと寄つて」とかしじゅう指示を出している。段田安則さんが橋の上から川にトランクを投げたシーンでビエールさんと村上さんは後ろの方の車からそれを見ているのですが、井上が車の排気ガスに興味を持って「排気ガス」と指示すると、みんな演技しているのにカメラは全部排気ガスを撮った。(笑)誰も段田さん、ビエールさんを撮っていません。**瀧** あのシーンは段田さんが「翔子」と叫んでトランクを投げ、そのあとスローになって終わっています。撮影ではそのあと「翔子！翔子！」と叫ぶのが5分くらい続きます。それも真夜中、激寒の中、5セット繰り返す。段田さんは最後顔真っ青になっていました。

渡辺 ロケハン、シナハンは？
井上 横山秀夫さんが作品のモデルにしたであろう誘拐事件があつて、その現場をまわるのがシナハンの代わりでした。実際の事件で投げ込んだ川があり、原作にリアリティーをもって何度も出てきます。事件のリアリティーにはこだわりました。
瀧 前後にのりしろをつける撮り方は演技の準備の意味もあります。「用意、はい！」

ですぐ泣ける俳優さんもいますが、僕みたいないつもは芝居をしていない人間がまじっていたり、記者会見のように多くの人が言い合いをしているシーンは「3、2、1はい！」で始められない。その前の使われない30秒なりの助走の時間が必要なんです。ここは絶対に要らないと思つたところもあります。(笑)

井上 台本に台詞がありト書きがあり、おもしろいなあと思つてその通り映像にすればドラマができると思われませんが、実はそうはならない。台本にAだと書いてあつて現場に行くときAではダメな場合がある。するとシーンの印象はまるで違つものになる。あるいは台本を読んだ段階では「ここが一番重要な台詞だと思つていたところが現場で違つと気づくことがある。そんなことを多く経験するとどれだけ現場を豊かにできるかと考え、それが事前の準備より大事になる。僕はカメラテストをやりませんが、現場に着いたら自然に始まるようにしている。若に若いて警官が「こちらです」と言えば芝居は続く。カメラマンは全くテストをせず新鮮な感覚でとる。段取りをつけておくとカメラマンはあらかじめ「ここだ」と構える。どこに行くかわからないというのがスタッフにとっても大事です。役者だけでなくスタッフが新鮮な感覚でないと新鮮な切り身は生まれなと思います。僕がドラマに入った最初のことはまずカット制りがあつて、偉いカメラマンがいると「決めたフレームの中に役者さん入ってください」と指示したりしたのですが、これはダメだな、面白くないなと思つた。そうすると自分の方法論を考える。それで5

セットです。

屋敷 5セットでも井上は毎セット同じカメラ位置では撮らない。

瀧 顔洗うシーンで洗面台の排水口にカメラがあった。あの映像使ったのかな？

井上 使いました。

屋敷 警務部長をやった中原大輔さんは毎回やるのが違った。泉警本部長はアイクンとに食べるものが違った。ボジションも芝居もアイクンと違った。

井上 それでもつながる。つながりは大雑把です。

渡辺 毎回これが唯一のチャンスという緊張感で繰り返したことのドキュメンタリーというわけですか。

瀧 そんな意気込みですが、どうにでもしてくれと腹くくっていました。毎朝4時とか5時に僕の自宅に屋敷さんが迎えにくる。目をこすりながら車に乗って、毎日群馬まで連れていかれる。2時間、3時間かけて。そして撮影をわあつとやっつて、夜その車で送られて自宅でおろされる。強制労働に近い。特殊な数か月を過ごしました。



ビエール 浦氏



屋敷 陽太郎氏



井上 剛氏



大森 謙美男氏



司会 滝 誠史氏

井上 音を作った大友さんは「クライマーズハイ」のスタッフで、台本をみてすぐこの世界がわかったようです。群馬に一度お連れして、北関東の乾いた感じの音楽にしてくださいと頼みました。それをどうつけるかは音響効果のスタッフがふつうのセオリーにない特殊なつけ方をしました。

屋敷 いま音楽の録音は楽器ごとにそれぞれとって、あとでミックスして使うのがほとんどです。演奏者を集めていっぺんにとるよりその方が効果的なのですが、今回あえてアナログのスタジオでアナログのとり方をしました。

井上 東京で一番古い、味のあるスタジオが吉祥寺にあつて、そことつた。NHKには最新鋭の機材があつて、これとすると音はいいのですが、ゲキパン、BGMになつてしまふ。吉祥寺でとるとさささとした質感の音になつて、音楽でなく現実音、効果音ではないかと思われような音になつた。昭和を意識していた。

瀧 前から疑問に思っていたのですが、5話の最後で電話がかかってくる。原作でも電話がかかってくるが、何も変わらなかった。三上は元に戻ったただけだという印象です。三上

に褒美をあげなくてもいいのに、と思つた。大森 あれがないとやはり終わらない。三上さんへの褒美ではなく、このドラマを見てくれた人への褒美です。誰からの電話と明確にしないで、見る人には希望を与えるものにしたかった。

買間 群馬県について語っていただけませんか。

屋敷 原作ではD県。それをどこで撮影するか迷いました。車のシーンが多いのもっと遠い地方が楽かなあと思つたのですが、やはりこれは群馬の乾いた空気のところでき成立しない物語だと群馬のロケにこだわりました。

買間 ビエール瀧さんがラジオで「俺の字は丸っこくて三上の字に似合わない」と言つていたことについて……

瀧 チームの人間の目古に手紙を書くシーンがあつて、これが固まっていた人間の心を溶かすような大事な手紙です。しかし僕は丸文字なんです。非常に緊張感を殺ぐ、見ている人はずっこける。「ワうなんでしょう？」と井上さんに言つたら、「いや、それもリアルですら」と。(笑い) 娘のあゆみの失踪人捜索願の書類も僕の字で書いている。井上さんはそこには妥協がない。喫茶店でピラフを食べながらの、短いシーンですが、30分以上かかって、ピラフは完食しました。

井上 でも丸文字だから心は溶けますね。(笑い)

井上 でも丸文字だから心は溶けますね。(笑い)

瀧 群馬は田舎だけど大自然がいっぱいというのではない。新しいものがなかなか始まらなくて、古いものが終わっていない。昭和の時間がずっと続いている感じです。「64」の事件が終わっていない、閉塞感というか、そんな意味で凄いい場所だった。大きな幹線道路がまっすぐ走っていてまわりに高圧線の鉄塔が並んでいるのが見える。上州の空が風が吹くうら寂しい場所。こわい気もするがファンタジーもある好きな風景です。

井上 よくわかります。横山さんが描いた世界はこの土地に行つても撮れるのかもしれないけれど、結局引き寄せられた。音楽も「D県」という群馬県を強くイメージした曲を大友さんに作つて貰いました。このドラマのイメージがわく場所でした。

漬物工場が多い。横山さんは鉄塔を見、漬物工場を見、一つ一つリアリティーを積み上げて着想したのだなあ、とだんだんその世界に引き込まれていった。

渡辺 赤城山、妙義山、榛名山の3つの山がある。群馬県を走ると必ずどれかの山が見える。それが正直に出ているので、これがD県だと思ひました。

瀧 「トト姉ちゃん」の森田屋もあの県に移りました。(笑い)

ラジオのページ

むさしのFM「発信！わがまち・武蔵野人」敗戦70年特集」からのメッセージ

鎌内啓子

コミュニケーションむさしのFM(1995年3月開局)の長寿番組「発信！わがまち・武蔵野人」では、以前より「戦争体験世代に直接語って頂ける時間はそう長くはない。」との思いで取組んできましたが、昨年・2015年を耳慣れた「戦後70年」とせず、単に戦争終結という通過点ではなく「敗戦70年特集」として武蔵野地区在住の戦争体験者に語っていただきました。その史実と意味を顧みれば、記録データの向こうに一人一人かけがえのない人生が自ずと想像できます。以下番組で語られた戦争体験者の抄録です。

近所に「高射砲台座」出現！

(島津好江さん・武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会・82歳・開朗・7月10日放送)

「記憶鮮明に「戦争語り部活動」を続けたい。第二次大戦は小2〜6年、父はじめ男性は皆出征、働き手がいなくなり農家は大変！家には2個中隊が同宿。先月、自宅近くの住宅地に「高射砲台座」出現！畑に設置された扇状6基の内1基だと、見た瞬間わかった。東側3基は当時4・12空襲で破壊、弾薬庫爆発で兵士28人が犠牲。家

の庭にもバラバラの遺体が降ってきて、拾って吊った。人為的な戦争で命を失うなどあつてはならない悲しいこと。語り部を続ける「記録する会」で紙芝居を作り、兵隊の暮しを伝えたい。

シベリア抑留者たちの戦後

(富田武さん・成蹊大学名誉教授・70歳、8月14日放送)

1945年9月疎開先福島県田村郡で誕生。戦後70年丸々生きてきた。関東軍将校の大叔父のソ連抑留が研究のきっかけ。最初は日本帝国主義侵略の尖兵・関東軍将校の研究は躊躇したが、シベリア抑留60万・家族親戚友人含め1千万人近くが体験した事実の重さを受け止め、歴史家の使命義務として貢献を。「寒さ・飢え・労働」三重苦を被った抑留者の平均年齢は90歳。忘れられようとしている体験をいかに後世に伝え、歴史にどう位置づけるか？敗戦年生れの自分は接点におり、研究はライフワーク。

ファッションで世界を変えたい！

(鶴田能史さん・Tenbo代表デザイナー・34歳・吉祥寺本町、8月21日放送)

障害者も健常者も分け隔てなく、若者男女みなが楽しめるビジュアルデザインを提案。さらに人類普遍「平和を願う」テーマを掲げ、折鶴デザインシャツを「広島平和祈念館・原爆資料館」にアピール。秋の「東京コレクション」出展に向けSNSで

世界に発信、支援募集&リターンでショーを観覧・共感するクラウドファンディングを活用し達成。ショーは「平和」をキーワードに、原爆リトルボーイ(広島・ファットマン(長崎)を擬人化し衝撃の開幕をした。

戦争は終わっても終わらない

(天石芳野さん・報道写真家・御殿山、8月28日放送)

ベトナム、カンボジア、コンゴ、アフガン、広島、長崎、福島など戦争や災害に直面した人々の姿を正面から撮影した40年に渡る活動の中で、戦争の傷を超えて不屈に生きる人々に焦点を当てた集大成写真集を7月出版。40年以上前に東南アジアを訪れた時、日本軍の残虐行為を訴える人々の真剣な表情、沖縄戦のこと、広島・長崎の原爆で被曝したことを抱えながらも、乗り越え懸命に生きている姿は、まさに戦争は終わっても終わっていない現実を突き付けられた。

中島飛行機大空襲を体験

(佐久間敏郎さん・本町コミセン副委員長・80歳、11月20日放送)

父は中島飛行機操縦工場幹部、叔父が武器製作所工場長。そんな関係でS17操縦から中島附属病院前に転居。S19・11・24早過ぎ、サイパンでニアンを発進したB29爆撃機24機が中島飛行機武蔵製作所(現富士重工)を爆撃。250kg爆弾が3階建

鉄筋ビルを筒抜け！工場内の死者57名、負傷75名。空襲警報で自宅防空壕に避難、耳を劈く爆音・猛烈な振動に震えた。米空襲から中島飛行機工場を守るため、屋根が支煙に見えるよう、東京駅から貨物電車でも来たベンキ屋1000人が1日で塗ったり；危険になり12月長野県岡谷に疎開した。

満州での恐怖体験

(十原洋子さん・「平和記念展示資料館」語り部・82歳、11月27日放送)

父が公使領「農事試験場」赴任、ロシア文化音の満州で3〜12歳を過ごす。戦時色一色「神風」が吹くから日本は負けない」と教わる。S20・8月ソ連軍の爆撃が始まり集団生活に。公使領は暴動の街と化し家財・天井・床板まで略奪！小学高学年女兒も丸坊主にし「マダム・ダワイ(女を出せ)」と迫るソ連軍囚人兵から身を守った。S21中国国府軍vs共産軍の内戦に巻き込まれる。兵隊が各家庭に10人宿営、機1枚隣室の恐怖！親と別れ、妹と引揚げ船(米軍LST)で博多〜札幌までひと月、瘦せ細るも無事到着。80歳まで教壇に立ち、今夏より「語り部活動」を始める。70年間、親にも言えず辛かった思いを話しホッとした。初めて語り、自らの心がケアされた。今あるのが平和。自覚して大切に！いつどんな形で戦争に巻き込まれるかわからない。

番組に徹底していたのは、悲惨な過去をいかに後悔・反省すべきか、そして未来へ

の責任は私たちにあり、平和がどれほど尊く、守るのが難しさをゲストの皆様が危機感を持って語られました。この番組はむさしのFM市民の会で制作し、毎年発行する広報誌「ON・AIR」でも今年の春（敗戦70年特集）として誌上再録しました。目にした市民の皆様から「ラジオらしいいい企画ですね。今後も続けて下さい」と励ましの反響がありました。スタッフ一同武蔵野地域の「戦争の語り部」に今後とも出演していただこうと意を強くしました。

(むさしのFM 市民の会) 清水誠

ラジオとの運命的な出会い

ラジオ業界に飛び込んでからあつという間の40年が過ぎました。最初の20年は制作会社とフリーランスのディレクターとしてラジオの番組制作に携わり、その後縁あって地元ラジオ局FM NACK5に入社し番組制作を続けました。

あり難いことに念願のラジオ番組の制作に携わることが出来て40年。この度、大先輩が大勢いらっしゃる放送人の会に入会できたことを光栄に思います。未経験者ではありませんが、これからはラジオの基礎を築いてくださった諸先輩方のお話を伺いながら、それを若きラジオマンへ伝えていく役割を果たしていきたいと思います。

ラジオに関心のある若者に出会いたいと願っていた矢先、日本大学芸術学部の放送学科で非常勤講師として授業を担当する機会をいただきました。まず驚いたのはラジオを聴いている学生は皆無かったということ。実

は彼らはパソコンやスマートフォンで普通にラジオを聴いていたのです。街で「スマホで何を聞いているか」調査をしたところ、ラジオ番組を聴いている人が想像以上に多かったですという結果にも驚きました。

若者のラジオ離れが叫ばれて久しいですが、スマホの普及は千載一遇のチャンスです。若者にとって「ラジオ」や「CDラジオ」は見ただけでも触ったことも無い昔の道具ですが、いつの間にかポケットの中に入っているのです。そこでスマホ用アプリの開発にも参加し、リスナーの感動やアンケートをスタジオでダイレクトにキャッチできる「NACK5タッチ」、リスナーの声をワンタッチで番組宛てに送ることが出来る「NACK5ボイス」。この二つを合体した「ラジタス」はラジオの楽しさをプラスするというテーマで好評をいただき既に導入していただいた局もあります。今後もリスナーと一緒に番組を作っていくような楽しいアプリを開発していきたいと思います。

オールドメディアといわれるラジオですが、ラジオ未体験の若者には新鮮なものとして、従来のラジオファンには良い音で途切れない便利なラジオとして、認知・復活させていきたいと思います。もちろん制作現場においても、今、若者が聴きたい番組作りのサポートをする傍ら、私自身が聴きたい番組も遠慮なく作り続けていきたいと思います。私とラジオとの出会いは、ラジオ好きの父が小学校の入学祝いを買ってくれたゲルマニウムラジオのキットでした。組み立てが終わり人の声が聞こえた時の驚きと感動は今でも鮮明に覚えています。

父は戦時中元海軍で駆逐艦に乗っていました。戦後は横浜の会社に勤務していたことから山下公園の水川丸に何度も連れていかれました。ある日、水川丸の上で父が「みんな戦死してしまつたのに俺だけ生き残ってしまった」と言ったのを覚えています。

その30年後、FMNACK5の番組審議会委員で埼玉県出身のロックバンド「頭脳警察」のボーカル、PANTAさんに出会いました。ある日、PANTAさんが「もし水川丸が無かったらオレは生まれてないんだよ」と呟いたのを私は聞き逃しませんでした。

詳しく聞くとPANTAさんのお母様は看護婦で戦時中はベナンの病院に勤務していたが戦禍がひどくなり帰国命令が出て、闇夜に乗じて何とか病院船の水川丸に乗ることが出来たものの何度も沈没の危機にさらされ、命がらから帰国したそうです。

その話しを聞いて自分は知らなかつた水川丸の歴史を番組として描いてみたいと思い、PANTAさんのお母様の足跡を辿るため、PANTAさんと一緒に水川丸の歴史や当時を知る関係者への取材を開始しました。少ない生存者、高齢者も多く手掛かりはなかなか見つからず諦めかけた時、ひとりの病院船水川丸の乗組員だった人物に会うことが出来ました。機雷による爆発、潜水艦の執拗な追尾、恐怖から発狂する者、海に飛び込み自殺する者、航空燃料を積んでいたことが発覚した時に自爆するためのスイッチの存在など、聞いたことも無い話が次々に飛び出しました。

もともと水川丸は、北太平洋航路用に頭丈に建造された貨客船でした。豪華な内装と高

級な食事知られ、チャップリンも乗船した豪華船でした。しかし戦争が始まると軍に徴用され病院船に改造され、多くの命を救い、多くの命を危険にさらしながらも、何とか沈没を免れ、PANTAさんのお母様とともに生き延びたのです。戦後は引き揚げ船に使われ、やがて元の北太平洋航路に復帰、フルブライト留学生をアメリカに送るなど日本の復興にも貢献。現役を退いた後は山下公園に係留され横浜のシンボルとして親しまれてきました。

番組取材中、幾度か暗礁に乗り上げましたが、その度にPANTAさんのお母様が見えない糸で引っ張ってくれた、そんな気がしています。PANTAさんのお母様の命を救った水川丸、水川丸に祀られていた水川神社、水川神社の近くの大宮に移転したばかりのFMNACK5。

不思議な縁がったこの番組は平成19年に「命の船・病院船水川丸」として放送し、日本民間放送連盟賞と日本放送文化大賞で優秀賞をいただきました。【日本大学芸術学部非常勤講師】

永六輔さん追憶特集

秋田和典 (音楽ラジオディレクター)

昭和59年、東海ラジオは創立25周年を迎え、特別番組「25時間スーパーワイドLOVE TOKYO」を11月23、24日に放送しました。永六輔さんには、24日朝の「ラジオはふれあいの街」のパートで、午前8時から3時間の番組パーソナリティをお願いしました。きっかけはフォーク歌手笠

本透さん、笠木さんは、岐阜県中津川市で開かれた野外音楽フェス「全日本フォークジャンボリー」にも関わった方ですが、高石ともやさんを通じて水さんとの交流もあり、番組出演となりました。印象に残ったのは冒頭のトークで、当日の朝宿泊先のホテルから局までの道のりの風景や直前の番組の話題を織りこみながら実に自然に番組が始まっていた事です。東海地方の様々な人たちとも繋がっている水さんは御在所岳のトンボ博士市橋甫さんらにインタビュするなどして進行、市井の人たちと共にあるラジオの姿を巧みに伝えていたという番組でした。

田中秋夫 (放送人の会理事)

永さんを身近にお見かけしたのは1962年の大学3年の頃。三木鶏郎さんが主宰していたコント作家集団「元談工房」の研修生募集に友人の伊藤アキラ君（現在は作詞家）と共に応募したのがきっかけだった。

工房が企画制作するラジオ番組で使うコントの案を提出する為、四谷二丁目にあった工房の「凡天寮」に出入りするようになった。当時、永さんは鶏郎さんの愛弟子としてNHKテレビ「夢であいましょう」の構成作家兼出演者として活躍されていたが、時々「凡天寮」に頻来と現れることがあり、憧れの眼差しを注いだ事を記憶している。

鶏郎さんは戦後連合国占領下時代に放送されたNHKラジオの「日曜娯楽版」の作家兼音楽家として政治や社会を痛烈に風刺したコントや冗談音楽で大旋風を巻き起こしたが、永さんは高校生の頃からこの番組（コント）を投稿する常連だったという。その後

「日曜娯楽版」は政治風刺を嫌った時の政権による圧力で打ち切りとなり、鶏郎グループは活躍の舞台を当時開局したばかりの民放ラジオ各局に移し、1956年には「有」元談工房を立ち上げた。永さんは社長を引き受ける一方、構成作家、作詞家、出演者として次々に放送界に活躍の場を広げていった。しかしその後、テレビを「危ういメディア」として出演を控えるようになり、TBSラジオを中心に活動するようになった。各地の伝統芸能を支援する一方、フォーク界の才能を愛し高石友也、小室等、北山修たちと交流を深めていた。私が担当した文化放送の「さだまさしのセイヤング」にも2回ほどゲスト出演をお願いで座談の名人二人によるトークを披露してもらった。一方、永さんは「60年安保反対デモ」「軍自連」「反原発集会」「9条の会」などに参加する等、鶏郎グループのDNAである反骨精神に溢れた一生を費やされた。

放送界の偉大な先輩に会えました。

つボイノリオ (ラジオパーソナリティ)

永さんが、東海地方に仕事ある度に、CBラジオ「つボイノリオ」の聞けば聞くほど「フラー」と立ち寄るようになった最初の頃、「聞けば聞くほど」では、橋屋提供の「誰か」と「こか」も、ネットしていました。永さんを交えて放送しているうちに、「誰か」と「こか」の時間が近づいてきました。

「水さんと一緒に、このコーナーを聴くのもなかなかですね」と私が言ったら、水さんは「僕がここにいるのだから、そのコーナーはとほしまししょう。このまま話を続けましょう。」とそんなこととして大丈夫ですか。」

「大丈夫、僕が橋屋にも言っておきます。」ディレクターは判断しかねている様子。「いから止めて」と永さん。

そして予定の時刻になっても「誰か」と「こか」で放送されませんでした。制作部長、局長、営業の人が下の階から飛んできてディレクターを怒鳴りつけている。「だって永さんがこてんやわんやのスタジオの外、水さんは悠々としゃべり続け、私たちは、無事に放送を終えました。」

こんな楽しい思い出をいっぱいいただきました。水さん、本当にありがとうございました。

石井彰 (放送作家)

七夕の日に水六輔さんが「帰郷らめ旅」に出られてから、はや2か月が経った。

私は、TBSラジオの人氣長寿番組「水六輔の誰か」と「こか」の二代目ディレクターとして、16年間毎週1回、水さんの素敵な旅の話や、終生変わらなかった「平和への想い」を聴き続けた。日本一の聴き手だった速藤泰子さん、構成作家の崎南海士さん、優れたミキサーの方たち、そして初代ディレクターで後にプロデューサーとして最期まで番組を見守った橋本隆さんらに支えられ、「なにもしない演出家」だった。

この番組は、私にとつてたんなる「お仕事」ではなく、放送の大先輩からラジオについて学び、自らの生き方をも考えさせられる、とても貴重な時間だった。

ここで学んだことがあったからこそ、フリーで放送の仕事をして、30年以上にも渡って続

けてこられたのだと感謝している。

永さんは厳格な「弟子を持たない」主義だったが、私は勝手に弟子として学び続けた。水さんから学んだことは数多くある。なかでも自ら実践された、ラジオのパーソナリティは仕事ではなく「生き方」ということをラジオに携わる多くの人々に伝えたいことだ。

「ラジオの電波が届く先へ行って（旅して）、そこで見たこと聞いたことをスタジオに持ち帰って話す」師事された民俗学者・宮本常一さんの教えを、水さんはずっとかたくなに守ってきた。この旅の成果が、やがて庶民の暮らしの記録ともいえる「無名人語録」につながっていく。また最後まで「聴取者からの集書」を大事にして、メールやFAXを使わなかった。そして番組で読まなかった集書にも全部目を通し、直筆で返事を書き続けた。

スタジオの中からテレビやネットの話題だけで社会を語る、いわば「片手間のパーソナリティ」が多い現状は、ラジオをさらに貧しくしていくだろう。

水さんから学んだことは限りなく多く、そして深いものばかりなので、とてもこのスペースには書き切れない。最新の『放送レポート』262号と11月発行の『月刊民放』11月号の拙稿を、併せてお読みいただければ幸いです。

第57回放送人句会

平成28年6月8日(水) 於：赤坂・表屋
 出席：伊藤悦郎、荻野慶人、近藤久仁(初参加)、佐々木光野、新村もとを、西川阿舟、深尾一化(出席七名) 不在投句：山泉ほん太、森治美
 兼題：風薫る、雷、あめんぼう、時間切れ(業界用語)

青葉木葉また終電は間に合ふか ぼん太
 蚊遣り尽き縁の将棋も時間切れ 一化
 雷鳴が去りなほ握る手の感ひ 一化
 雷の近づき空気が青くなり 視郎
 風薫る森のフルート製作所 視郎
 薫風へ棟上げの餅撒きにけり もとを
 暫くは吹かれてあした風薫る もとを
 * 水面には膜あるやうにあめんぼう もとを
 青白く残る頬打つはたがみ 一化
 暫くは吹かれてあした風薫る もとを
 あめんぼうのスイスイスーグラ走りかな ぼん太
 雷鳴を残して里の眠りたる ぼん太
 ロープウエー高度くんくん風かをる ぼん太
 かの出会ひ雷落ちし時にあり 治美
 眉ほそき美女薫風を駆け抜けたり 光野
 船上でもう気な君風薫る 治美
 あめんぼうの憂き世捨てたる怪さかな 一化
 時間切れ撮影現場梅雨に入る 治美
 雷はげし隣の赤児泣きやまず 視郎
 瘦尾根の眼下の雲に雷光る 視郎
 その先は晴染になるぞあめんぼう 視郎

薫風に冷し中華のれん挿れ 光野
 薫風を背に銀輪が土手を駆け 一化
 遠来が頼音にまじる露天風呂 久二
 あめんぼう吾と変らぬ空気吸ふ 慶人
 水張つて畦に薫風誘へり もとを
 夏山家時間切れ前男児保護 慶人
 恐山漆黒の夜に落雷す 視郎
 あめんぼう次の一手を考へ中 慶人
 稲妻に手錠をかけたクレイ逝く 久二
 いきなりの雷鳴村を突つ走る ぼん太
 震度七怯ゆる街に風薫る 慶人
 草野球たま薫風の空に浴け 光野

細帯を解けは蘭こゆ遠き雷 もとを
 岩手山映す水面にあめんぼう 久二
 か細い身肉食たなんてあめんぼう 久二

第58回放送人句会

平成28年8月10日(水) 於：赤坂・表屋
 選考：星野高士
 出席：伊藤悦郎、荻野慶人、佐々木光野、中島丈博、新村もとを、西川阿舟、林備後、深尾一化 不在投句：森治美、山泉ほん太
 兼題：流れ星、踊、蜘蛛、黒子(業界用語)
 【星野高士特選】
 流星やもはや千代の富士に会へず 光野
 集落の今宵かぎりの盆踊 備後
 ひぐらしに愛ひ聴きつつ母眠る 光野
 集まりし黒子の肩に残暑あり 治美
 盆踊り体操教師まん中に 視郎
 かなかなのまだ聞こえをり薄暗し 阿舟
 簾引で黒子を決めて村芝居 備後

蜘蛛の社を抜けて家路着く 丈博
 蜘蛛と落日はまた火照りつつ もとを
 踊る子に黒子のこどく手を取りて 一化
 【星野高士選】

白船に黒子忙しき揚花火 一化
 流れ星逝きし友の名指折りて 慶人
 流星や悲ろきことのみ思ひ知る 丈博
 星浴びて踊る安甲屋エンタかな 阿舟
 汗ぬぐう黒衣茶髪で大男 視郎
 渦を見て夜は踊の渦の中 阿舟
 星飛んでまた出直しのできさうな 一化
 寝わがての邪曲の夢や星流る 丈博
 流星や大三角を横切れり 光野
 蜘蛛や死屍累々を悼むやう 慶人
 ひぐらしの鳴くを待ちある木立かな 備後
 星飛びて蘭の増したる山の宿 もとを
 蜘蛛の声までの空暗くなる 視郎
 里は寝て音無く星の飛びにけり ぼん太
 ゆらゆらと光と砂の踊かな 治美
 蜘蛛の暮色に染むる里曲かな 一化
 流れ星あなただの町へ流れ行く 視郎
 かなかなや木曾路は雨後の明るさに ぼん太
 前を行く踊り上手のうなじかな 一化
 流れ星幾万年の旅の果て 一化
 かなかなや陸下の願ひわかるかに 阿舟
 ひぐらしの声に驚く朝となり 治美
 流星や想ひ半ばの命あり 治美
 冥土より頬被りして踊りの輪 備後
 【会員互選】
 かなかなやそらそらうちへかへらうか 備後

日の落ちてやがて始まる踊かな もとを
 星奔る数万キロの近きかな 光野
 盆踊り女装男装入り乱れ 丈博
 今生を流星のごとく思ふ今朝 光野
 流星の消えある先を見てみたし 治美
 阿波にひけとらぬ踊や高円寺 阿舟
 屋根に寝て流れ星見し子も我 阿舟
 面差の似たる人あり盆踊り 備後
 里は寝て音無く星の飛びにけり ぼん太
 お揃いの籠を染出し踊り行く 視郎

【選考時】
 踊りに北国美人京美人 星野 高士
 蜘蛛や夕べに刻をこらめあし 丈博
 踊子の手日本海らしき風 備後
 蜘蛛や数へきらざる夜の音 もとを
 蜘蛛や木々は正しき向きをして 視郎
 いつの間にか黒子も共に踊りけり ぼん太
 星流れく山湖は波たたむ 治美

次回放送人句会
 平成28年10月5日(水) 18時頃から、投句
 締切19時
 赤坂・表屋 (投句 Fax:03-3586-0056)
 兼題：野菊、身に入む、吊るし植キニー(業界用語)

新人会員紹介 (入会日順)

清水誠 (しみずまこと) 52年7月生。朝日
ムコ、朝日P.M.C (パシフィック・ミュージッ
ク・コーポレーション) 朝日FMNACKS5
制作部長を経て現在朝日NACKS5プロジ
ェクト

石原信和 (いしはらのぶかず) 53年7月生。
76年ニッポン放送入社。報道部、制作部、
第1営業部、営業促進課、総務部、編成管理
部を歴任して平成22年退職。「オールナイト
ニッポン」「大入りダイヤルまた青の口」「夜
のドラマハウス」「拝啓青春朝日」「玉置宏の
笑顔でこんにちは」などを担当

桜井元 (さくらいはじめ) 56年4月生。81
年朝日新聞社入社。91年外報部語学研修で
ドイツ・ベル (在ケルン) へ派遣。93年
東京本社政治部、97年名古屋本社社会部次
長、97年ボン支局長、99年ベルリン支局長
00年東京本社政治部次長、社会部次長、01
年社長室社長秘書役、03年電波セクション
担当部長、07年九州朝日放送フロックネッ
ト担当局長(出向)、09年東日本放送役員出
向、13年秋田朝日放送専務取締役、14年
秋田放送代表取締役社長(現職)。

天野龍範 (あまのしょうはん) (輝和) 48年
1月生。朝日日本道路交通情報センターの創立
に参画。朝日・WAVEの創立に出向参画
朝日FM京都の創立に参画。朝日・WAVE・
MUSICに復帰。専務としてネットワーキ
ング・ラジオ開局。現在FMコミニティー川口
朝日アドバイザー、傍聴。

佐藤幹夫 (さとうみきお) 55年8月生。78
年NHK入局。82年報道局報道番組部。以

後報道番組や大型特集番組の制作を担当

06年報道局制作センター番組部長。07年報
道番組センター長。08年放送総局スペシャ
ル番組センター長。11年名古屋放送局長。
13年定年退職。現在NHKエンタープライ
ズ専務取締役、制作本部長

中島由貴 (なかじまゆき) 69年11月生。92
年NHK入局。ドラマ番組部配属。以降名古屋
局、NEP、大阪局と異動しながらドラマ
演出として制作を担当。担当番組「ラジオド
ラマ」「プライミートゥーザムーン」「土曜ドラ
マ」「55歳からのハローライブ」特集ドラマ
「お買い物」。現在NHKエンタープライズ
ドラマ部出向。

新刊紹介

老いの風景 物語で経験する「生老病死」

石光 勝著



ラジオ・テレビの放送現場OBたちが番組
制作の経験から放送メディアの未来像を担
う後継の現場と作品を通して語り合い、余生
の「生きがい」を求める集まりが「放送人の
会」だ。(ポランティア)。放送の臨場感を
仲間との交流で充実感を得るわけか。
例えば、必ずしも一致しない各国の文化事

事務局スタッフ募集

会員の皆様へ

長らく事務局出仕事をして下さった佐藤真美子
さんが、事情により9月末で退職することになり
ました。煩瑣な事務局業務を9年間続けて、「放送
人の会」の活動を支えてくれました。本当にお疲
れ様でした。有難うございます。

さて、今後の事務局体制ですが、基本的には須
斉さんが週3日(月水金)勤務することになり、
また逸見理事が短期的に対応して頂けることにな
っています。しかし、会の活動の多様な事務
局業務が増えていることを考えると、来年3月を
目途に、週2日(午後)勤務で仕事をして下さる
方を募集したいと思います。お知り合いの方で、
人柄の信頼できる方がいらっしゃいましたら是非
ご推薦ください。できれば、パソコン業務に優れ
た方を希望しています。

時給は1,200円程度を想定しています。

どうぞ宜しくお願いします。

総務委員会

情をふまえた上で運営される日韓中3国の
イベントなど実績を重ねている。しかし、
お世辞半分の「あなた、いつまでもお若いで
すなあ」に、照れたり(フリ)をして、「いや、
寄る年波で」と心にもなく応じ合うテーマが
いつしか健康の話題に変わっていく。一人抜
け二人抜けする「お通夜」の席。つまり60
代、70代と老いを登るわれら会員の多くが、
「未踏の80歳」を迎えはじめた昨今である

石光 勝は文化放送報道部などを経て東
京12チャンネル(テレビ東京)の幹部とな
った人だが、役職を離れるやテレビ界外へ
「テレビ局削減論」など、ユニークなメデイ
ア経営の現場論を、ついで「生誕101年『カ
ミュ』に字を本当の正義」(いずれも新潮社
刊)で斬新な比較文化論に手を染めている。
放送人にはまれな構成員をわたしは愛して

きた。が「老いの風景 物語で経験する「生
老病死」

と、一見大型書店の平台上に並ぶ高齢者向け健
康書を装っている。そこが「付け目」で、五
感(視覚、嗅覚、味覚、聴覚、触覚)に生き
る人間の直接かつ素朴な「生」は他者による
間接的な「経験」によって、豊かにときに赤
裸々に広がる人間の遠景をズームアップし、
推理読み物ふうの物語化して迫る。

幾多の挿入文(それが小説、映画、演劇、
漫画の世界さるを過渡しつつ、まるでチッ
プを埋めるとあらゆる世界が現出するジグゾ
ーパズル遊びの驚きと楽しさに没れるのだ。
「経験」を物語にするスベで「老い」をか
みしめる、精神の旅日記とも読める。傘寿前
後のお仲間皆さん、手にしてみたら、とお
薦めしたい。(中央公論新社 定価1700
円 文責 松尾)

会員名簿

2016.9.23 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 天野禮範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 石原信和 磯智明 磯野恭子 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 太多亮 太田昌宏 大野秀樹 大原れいこ 岡弘道吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野暁 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由孝 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敏 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 清水満 志村一隆 下崎寛 下重咲子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよし 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中 秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つポイノオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中岡綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】 信井文夫 延江浩 【は】 萩原豊 橋本深 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 松前洋一 薫りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南謙 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川謙一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺絵史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記

『後妻業の女』が封切られ、2日目の日曜午後の部を東京郊外のシネコンで鑑賞。場内は中高年齢主体でほほ満原。男女は半々、ペア客が目立つのも珍しい光景。盛んな前宣伝に、京都で起きた類似犯罪騒ぎへの下世話な關心を呼び覚まされたことか、と驚く。作品は『先のない爺にええ夢見せたる』口説きのハウツー仕立てではなく、新規の結婚サギ稼業をめぐる悲喜こもももの群像人間喜劇(原作からの脚色も監督自身)。芸達者揃いの欲望表現の巧みと監督自身の風刺精神の冴えが、鑑賞者を万華鏡のような『鶴橋マジックワールド』に誘い込みます。「ハードボイルド・ファンタジック・コメディ」と名付け得る斬新な手法は、日本の喜劇映画の系譜上新機軸に相違なく、評判を呼ぶでしょう。悪の権化『運命の女』フラム・ファータールを演じる大竹しのぶさんの千変万化ぶりだけでも一見の価値あり。ちなみに、監督は主人公の『内なる可憐』を愛で、得意の俳句評で『なんかこう命をかけて花林橋』と讃えていて、熟年男性群の被害願望をそそります。▼それにしても、先般の石橋冠さん初監督映画『人生の約束』といい、この鶴橋新作といい、テレビドラマの名手が映画の世界でも輝く早であるのはうれしい限りです(典) ▼新刊紹介で紹介しなかったのですが書店で買うことができます。未読の紹介です。 鈴木嘉一著『テレビは男子一生の仕事』ドキドキメンタリスト牛山純一(平凡社刊、2376円)。牛山純一さんは日本テレビで『ノンフィクション劇場』など多くのドキュメンタリー作品を作り、独立して日本映像センター

事務局備品補充のお願い

事務局の備品が老朽化しています。事務機能を維持するため、使用なさいているOA機器、事務用品、家庭用備品などで、ご不要のものがありましたら、ご寄付ください。特に、ノート型パソコン、プリンター、ポット、小型冷蔵庫など。どうぞよろしくお願ひします。 <事務局> 作り膨大な映像資料を残しました。放送人の会創立に積極的に動き、会ができたなら委員長にと目されていたのですが、会設立の前に亡くなりました。本書はその牛山さんの伝記で、当会の会員の何人かが鈴木嘉一さんの取材を受けたと聞きました。▼今号は発行しないことになっていたので、8月になって『今年の終戦特集は面白い。座談会をやる』と松尾羊一さんから強いアンビールがあり、『そうだ、そうだ』と追隨する何名もの声があつて臨時に発行しました。いろんな方のご協力と経緯については、巻頭の今野会長の記事にある通りです。座談会出席者の方には突然の出席依頼で大変ご迷惑をかけた。毎年やってきた定点観測の記録は続けてこそ意味がある、やっつてよかつたと思つてます。どうか座談会の記事のご感想をお聞かせください。▼事務局の佐藤真美子さんが9月いっぱい退職することになりました。9月の理事会では「9年間、お父様のように皆さんに優しく可愛がっていただきました」と挨拶して一瞬声を詰まらせていました。これからテレビマンユニオンに勤めます。(掲載)